京都大学文学研究科　グローバル COE　「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

学会発表渡航支援報告書

（ふりがな） 氏　　名	うえお　まさみち 上尾　真道	所属・職名 京都大学文学部・GCOE 研究員
e-maill	ueoueo@gmail.com	
発 表 題 名 （英　　語）	A Genealogy of the Concept of Fetishism and its Psychoanalytic Significance	
著　者　名	Masamichi Ueo	
会　議　名 （英　　語）	III Annual Meeting International Society of Psychoanalysis and Philosophy	
開催地（国、市）	Brazil, Sao Paulo	
参 加 期 間	2010 年 11 月 22 日　　～11 月 25 日	

参加学会：

心理療法の技法論として登場した精神分析理論の持つ哲学的パースペクティブを検討するために組織された国際精神分析・哲学会の第三回会議では、「臨床概念の機能と領野」をテーマに、四日間のうちに１４の講演および４０件を越す一般発表が行われた。このうち、報告者は、一日目に一般発表を行い、三日目の講演にコメンテーターの役割で参加した。

発表：

報告者は会の一日目に「フェティシズム概念の系譜とその精神分析的意義」と題する発表を行った。この発表では、現在の社会における「フェティッシュ」的現象の意味の解明を目的としつつ、人類学から社会学、精神病理学、精神分析学と様々な人文学的領野にまたがって展開したこの概念の歴史を辿り、その知的背景を明らかにすることを目指した。その際、フェティシズム概念を取り巻く認識論的条件には二つの段階が認められた。ひとつは、人間を、対象との直接的接触から出発して発展していく存在として認識する経験論的・科学的視点の導入である。これについては、宗教史の文脈においてはド・ブロスが、また精神医学の領野ではビネが、時期は違えども、それまでのドクマ的イメージに支配されていた人間観を払拭しつつ、科学的人間観とともに「フェティシズム」概念を導入していることが確認される。第二の段階は、対象との直接的接触がもたらす疎外的決定論に対する批判を通じ、経験の背後に人間的潜勢力の次元を認めようとする段階であり、ここではマルクスおよびフロイトのフェティシズム理論が参照されることとなる。この第二のフェティシズムのパラダイムは、現実の平面が、社会野の構築に開かれつつ、同時に個人の内密な欲望の表現足りうるという意味で、二重性を備えているという認識から成り立っている。報告では、この二重性の整理として、特にフランスの精神分析家ジャック・ラカンの理論を参照した。最後に、現代の問題として、この内密な欲望の凡庸化という問題を指摘しながら、そこに再び人間の潜勢力を見出そうとする精神分析的努力を再評価する必要性について主張した。

学会発表渡航支援報告書

発表後のパネルディスカッションでは、「人文科学や精神分析の展開の中に、宗教的なものは未だ残っているのかどうか」という問いがパネルの司会者から報告者に対して提出された。これに対し報告者は、「確かに宗教的なものは残っているが、しかし、その位置と意義とを根本的に変化させることによってである」という旨の返答を行った。実証科学的言説に基礎付けられたグローバリズムが進行する中、文化、宗教の軋轢が問題となる現状を鑑みるに、ここでの質疑応答は、今後とも展開して考察するべき課題である。

コメンテーター：

報告者は会の三日目に Zeljko Loparic 氏により行われた講演「Winnicotian paradigm illustrated by clinical cases」のコメンテーターとして壇上に参加した。講演では、ウィニコットの精神分析理論が持つ革新的価値が、クーンの科学革命の説と関連付けて述べられ、また、その内容が「マーガレット・リトル」症例の検討を通じて議論された。これに対し報告者はコメンテーターとして、精神分析と科学の関係そのものに関する問いを提起した。一般的な科学の進歩のうちに精神分析の理論的展開を沿わせようとする Loparic 氏の議論に対し、報告者はまず、フロイト自身による科学と精神分析の関係の定義に言及し、その思想的含みについて紹介した。これを踏まえ、報告者は自身の見解として、科学の標準によって精神分析について議論するよりも、精神分析的視点から科学と人間の関係を考えることのほうが有意義ではないかとする問題提起を行った。これに対し Loparic 氏は、ウィニコットおよび精神分析の実践の臨床的かつ具体的価値を強調して応答した。ここでの議論は、科学とともに歩みを進める今日の治療環境を、社会思想的にどのように評価、あるいは批判していくべきかという問いにつながるものと思われる。今回の大会中に行われた総会で、次年度の大会テーマが議論された中でも、まさしくそのことが問題として取り上げられている。「苦悩を治療する必要はあるか？ Faut-il guéir la soufrrance?」という挑戦的な候補案も出される中、最終的に「治療、享楽、苦悩 guérison, jouissance, souffrance」というテーマが決定されたが、今日、公的なもの・親密なものを複雑に巻き込んで変転する社会状況において、改めてケアの役割を批判的に問わねばならないという問題意識が、会の参加者の多くに共有されていることがうかがい知れるものであった